

精神障害者のリハビリテーションは、入院主体型から自立生活を目標にした地域支援型の取り組みへと変化しているが、そのなかでの理学療法の位置づけはまだ明確でない。自殺企図による対麻痺、脳血管障害を合併する精神障害者などへの理学療法は増加しており、彼らの社会復帰には精神面と身体面の両面へのアプローチが不可欠であり、作業療法士、精神保健福祉士などとの協働的な理学療法が求められている。そこで本特集では、精神障害者のリハビリテーションの現状を把握し、理学療法士の役割と具体的な取り組みについて紹介する。

■精神障害をもつ人々に対するリハビリテーションの現状と課題(野中 猛論文)

精神障害をもつ人々に対するリハビリテーションは、その技術と政策が大きく転換している最中である。その基本的な概念と現状を整理し、今後の課題として必須の要素をバランス良く発展させるべきことを論じた。ケアマネジメントやチームワークにもふれ、理学療法士が広く精神保健の考え方と技術を心得ておくべきことをつけ加えた。

■精神障害者のとらえ方と理学療法アプローチの効果(仙波浩幸論文)

身体障害を有する統合失調症患者に対し、①日常生活動作の現状、②理学療法の実施に際して問題となる精神症状、③理学療法アウトカムに影響を及ぼす因子、④理学療法の視点からの患者分類の知見を考察し、理学療法治療実践ガイドライン作成の取り組みを紹介した。

当該患者を「活動性低下型」、「軽度障害型」、「精神症状顕在型」に3分類して、類型別に特徴、プログラムの内容、目標設定について基準を設けた。

■精神障害者の生活体力へのアプローチ(田村文彦, 他論文)

理学療法の各種手段は、身体に働きかけることで精神症状を改善する可能性を秘めており、ヘルスプロモーションの見地に立てば、精神障害者の健康回復に対する具体的なアプローチは理学療法士であっても実践は可能である。入院している精神障害者が自己の活力を維持するためには、日々の生活における適度な身体運動が必要であり、リハビリテーションプログラムに組み込まれなければならない。日常生活活動の営みに工夫を加えた比較的低レベルの身体運動でさえも、生活体力の低下を防ぐ効果が期待できる。

■精神障害に身体障害などを合併した患者への理学療法アプローチ(大月満里, 他論文)

精神障害に身体障害が重複した場合、理学療法士は身体障害だけではなく精神障害にも専門的に関わっていく必要がある。しかし、精神障害を合併していない場合と比べて、接し方が難しく、注意力や自覚性などに問題があるため、日常生活での改善に結びつかないことが少なくない。そのような患者に理学療法士が関わる場合、どのような点に留意して疾患・障害を捉えるか、症例を交えて経験に基づいて述べる。

■精神障害者の転倒事故分析とその対策(細井 匠, 他論文)

精神科病院長期入院患者を対象に、転倒事故発生状況を3年間調査した。その結果、転倒者数は年々増加していた。理学療法士が介入した転倒予防対策によって理学療法実施群では転倒予防効果がみられたが、未実施群の転倒件数は増加した。今後、精神科病院では高齢化にともなう身体的問題が頻出することは確実であり、理学療法士が必要とされることが予想される。